

## 図書紹介

田中統治・庄司一子・浜田博文著  
『学校教育論』

窪 田 眞 二\*

本書は、筑波大学教育学系に所属し、放送大学客員教授・准教授でもある3名の研究者が、ラジオの放送大学教材として執筆したものである。

テキストは、「～であるべきである。」「～でなければならない。」といったことばで締められている文章が多くなればなるほどおもしろくなるものであるし、『～論』とつく書名のもの、とりわけ教育を論じたものには少なからず見られる傾向だろうが、本書のまえがきにもあるように、ここでいう学校教育論の「論」とは理論を意味し、「学校教育の「あるべき姿」を主張するのではなく、その「あり様」について丹念に調べ、深い視点から考えることを重視する (p.3)」という趣旨は、全体を貫いていて、学校教育についての研究入門書として非常に読み応えもあり、読後感として充実感を持てるものになっている。「学校教育に関する実証的な研究の視点を学ぶこと」に本書のねらいがあり、そのねらいは十分に達せられている。また、「学校教育が抱える問題点を切り口としながら、それが社会現象として、他の組織・集団・関係において共通して現れる問題であることにも注意して、広い視野から原因に迫ることができるように工夫したい。それが共通科目の役割であると考えて、また、広く人間科学の視点から学校問題に関心を向けて欲しいからである。(p.11)」とある本講義の立場も肯けるところである。

本書では、各執筆者が5章ずつを担当し、全15回の講義で構成されている。

- 1－学校教育を考える視点 2－学校の社会的機能 3－学校教育の過程  
4－学校文化とカリキュラム 5－隠れたカリキュラム (以上、田中統治執筆)  
6－居場所としての学校 7－学校生活とストレス 8－教師が生徒に与える影響  
9－生徒の内面世界 10－学校での教育相談 (以上、庄司一子執筆)  
11－現代学校の制度原理 12－教員職務の特徴とやりがい 13－教員養成の仕組みと課題  
14－「組織」としての学校とその特質 15－学校のマネジメント

※筑波大学大学院人間総合科学研究科

と親・地域との連携（以上、浜田博文執筆）

1～5章では、学校の社会・組織・集団としての特徴をマクロな視点とミクロな視点を組み合わせながら解説し、それらが人間形成（社会化）にどのように関係しているかが、硬軟織り交ぜて流れるように解説されている。

6～10章では、学校生活において発生する心理的なストレスの問題を中心に、豊富な調査研究に基づく実証的な検討がなされ、学校生活の中での様々な実態や影響について、具体的に紹介されている。教師や生徒への援助や相談活動といった教育臨床的なアプローチの事例にも触れることができる。

11～15章では、学校制度の原理と基盤などから説き起こして教員の職務、教育改革の動向などにも触れながら、学校経営をめぐる基本問題を解説し、それらの問題の背景についても分かりやすく解説している。

おそらく、講義に触れた方々は、さまざまに散りばめられた専門的な用語や引用・参考文献から、さらなる知見への扉をたたくことになるのだろうと推察する。それは、ただ単に制度や仕組みを解説したテキストではなく、本書が学校教育をめぐるさまざまな問題をどのように理解し、受け止めたらよいのかという読者に、考える道筋を与えてくれるガイドブックになっていると思うからである。

例えば、第3章では学校の教育活動が生徒の社会化に対して持つ意味を、教育課程というキーワードを用いて検討している。ここには、学校の中で一体何が起きているのかを解釈する一つの方法が示されている。第8章では、教師が生徒に与える影響について、教師が行う雑談を手がかりとして検討している。ここには、教師と生徒との信頼関係を形成する上でのポイントを知るための手がかりがある。第14章では、個業性が強いと言われる教員の仕事の場である学校を「組織」としてとらえることの意味と意義について考察している。ここには、学級崩壊という教師にとって最も深刻な事態がなぜ起こるのかを知るための重要な手がかりが示されている。

全ての章末に、練習問題が挙げられている。テキストという本書の性格上、求められているのかと思うが、すぐ下に「練習問題の解答例」が並んで書かれてあるので、考える余地なく読み進めてしまう。解答例については、巻末にまとめて掲載してもよかったのではないかと思う。

田中統治・庄司一子・浜田博文著『学校教育論』

放送大学教育振興会，2008年，2,310円